

第二次世界大戦後におけるルドルフ・ニコライの歴史認識について

—ナチス体制下における学校田園寮活動の指導者として—

*江 頭 智 宏

1. はじめに
2. 機関誌『学校田園寮』の第1巻にみる歴史認識
3. 「回想記」にみる歴史認識
 - (1) 回想記の構成
 - (2) ナチスの権力掌握および政策に対する認識
 - (3) ナチス期の学校田園寮の増加に対する評価
 - (4) 第二次世界大戦と学校田園寮活動
 - (5) ドイツの支配地域の拡大と学校田園寮活動
 - (6) 学童疎開と学校田園寮活動
 - (7) 敗戦時の心情と学校田園寮活動
4. おわりに

1. はじめに

「学校田園寮活動」(Schullandheimarbeit)とは、「学校田園寮」(Schullandheim)という自然豊かな場所に設置された宿泊型教育施設に学級単位で滞在し、普段の学校生活では体験できない様々な活動を行なうことを通して通常の学校教育を補完する、現在まで続く進歩的な教育実践である。学校田園寮活動は、歴史的にみれば、第一次世界大戦後本格的に開始され、ヴァイマル期に隆盛した新教育運動の一翼を担うも、ナチスの権力掌握後も継続し、第二次世界大戦の開戦を契機として停止を余儀なくされ、戦後ドイツ連邦共和国（以下、西ドイツとする）において再興される、という経緯を有する。また、学校田園寮活動の普及拡大を目指した運動のことを「学校田園寮運動」(Schullandheimbewegung)という。

学校田園寮活動の歴史上最も重要な人物が、1926年に創設された「ドイツ学校田園寮全国連盟」(Reichsbund der deutschen Schullandheime)の理事長を務めるとともに、ドイツ学校田園寮全国連盟をナチス教員連盟に取り込む形で創設された「ナチス教員連盟学校

田園寮専門領域」のライヒ専門担当官をも務めることで、ヴァイマル期からナチス期にかけて学校田園寮活動のトップを務めた、ギムナジウムの教師ルドルフ・ニコライ(Rudolf Nicolai, 1885-1970)である。ニコライは、ナチス体制下ではナチスに入党していた人物でもある。本稿ではこうしたニコライの歴史認識に焦点を当て、第二次世界大戦後におけるニコライが、彼自らトップを務めたナチス期の学校田園寮活動を如何に認識していたのかについて、そしてその背後にあるナチスや第二次世界大戦について如何に認識していたのかについて明らかにすることを目的とするものである。

本稿と同様のテーマについて、筆者は既に、ニコライと同じくヴァイマル期以降の学校田園寮活動の指導的な立場にあったハインリヒ・ザールハーゲ(Heinrich Sahrhage, 1892-1969)に焦点を当てて考察したことがあり¹、本稿はその続報として位置付けられる（以下、注1の拙稿を本稿では「前稿」とする）。本稿の主役であるニコライとの関係でザールハーゲについて補足しておく、ザールハーゲはヴァイマル期のドイツ学校田園寮全国連盟では理事を務め、ナチス期の「ナチス教員連盟学校田園寮専門領域」では文書編纂のポストにあったことから、ヴァイマル期からナチス期にかけてはニコライをいわば「補佐」する立場にあった。

* 名古屋大学大学院教員

しかしながら、第二次世界大戦後は、ニコライが本拠地としていたアンナベルク・ブッフホルツの属したザクセン州が組み込まれたドイツ民主共和国（以下、東ドイツとする）では学校田園寮活動が再興されなかったことから、ニコライが学校田園寮活動の第一線から退いたのに伴い、西ドイツに位置したハンブルク州を拠点としていたザールハーゲが、ドイツ学校田園寮全国連盟を継承して戦後発足したドイツ学校田園寮連盟（Verband Deutscher Schullandheime）のトップである第一議長を務めることになった。このように、ヴァイマル期からナチス期を経て1960年代までの学校田園寮活動のトップを務めたのがニコライとザールハーゲの両者であったわけであるが、ザールハーゲについて検討した前稿を受けて、もう一方のニコライの歴史認識について明らかにするというのが本稿の位置付けである。

以上のことを踏まえ、本研究に関わる先行研究について、学校田園寮活動史研究とニコライ研究の観点から言及したい。学校田園寮活動の史的研究として最も重要なものは、管見の限り、ドイツ学校田園寮全国連盟の創設から数えて75周年を記念して2002年にドイツ学校田園寮連盟が編纂した、草創期から2000年までの学校田園寮活動の通史『時代の変遷の中の学校田園寮運動と学校田園寮教育』である。ニコライの本拠地が東ドイツに属したことから、当書の中で本稿と対象時期および地域が重なるのが、1945～1990年のソ連占領地域および東ドイツを対象としたB.カルステン論稿である²。ただしカルステンの論稿は、タイトルの中の学校田園寮運動に括弧が付されているように、東ドイツでは学校田園寮運動そのものは深く浸透しなかったことを承けて、学校田園寮に対応するものとして「旅行者宿」（Touristenstation）に主として焦点を当てている（ただし旅行者宿は学校田園寮とは異なって学校教育を補完するものではない）。そのため、第二次世界大戦後のニコライの歴史認識は検討の対象外である。なお、前稿でも言及したように、『時代の変遷の中の学校田園寮運動と学校田園寮教育』の中で1945年～1970年までの西側占領地域および西ドイツを対象としたK.クルーゼの論稿³においても、ザールハーゲないし他のナチス期に学校田園寮運動を担った学校田園寮活動関係者の歴史認識を問うという視点は見られない。

一方で、ニコライ研究に関して注目されるのは、S. F. ヒルベルトによるニコライの伝記『書物 環境—改革教育者ルドルフ・ニコライ—学校田園寮に尽くした一生』であり⁴、当書においては第二次世界大戦後のニ

コライにも言及されている。しかしながら、東ドイツでは学校田園寮活動自体が浸透しなかったことを受けて、当書でも第二次世界大戦後のことにはそもそもあまり紙幅が割かれておらず、彼の歴史認識についても対象となっていない。

以上のように、学校田園寮活動の歴史ならびにニコライに関する管見の限り最も重要な研究において、第二次世界大戦後におけるニコライの歴史認識は、学校田園寮活動を総体的に把握するうえでも極めて重要であるにも関わらず、検討の対象となっていないことが分かる。そうした未解明の領域を明らかにすることを本稿は目的としている。

2. 機関誌『学校田園寮』の第1巻にみる歴史認識

ザールハーゲを第一議長として、また彼の本拠地ハンブルクに本部を置く形で1950年に西ドイツで再建されたドイツ学校田園寮連盟は、かつてのドイツ学校田園寮全国連盟ないし全国連盟を取り込んだ「ナチス教員連盟学校田園寮専門領域」と同様に、機関誌の発行を、1951年1月より開始した。創刊時の機関誌の名称は『学校田園寮—ドイツ学校田園寮連盟のニュースレター—』であり、以降、サブタイトルの細かな変更はあるものの、現在に至るまで刊行が続いている（以下、機関誌は『学校田園寮』と表記する）。

先述したように、ニコライの本拠地であるアンナベルク・ブッフホルツは第二次世界大戦後東ドイツに属したため、ニコライがドイツ学校田園寮連盟に深く関与することはなかった。そのため、第一議長としての立場から『学校田園寮』に数多くの論稿を発表したザールハーゲとは異なり、ニコライは『学校田園寮』にはほとんど論稿を寄せていない（ただし戦前の機関誌にはニコライは多くの論稿を寄せている）。そうした中で注目されるのは、前身のドイツ学校田園寮全国連盟のトップとして、「かつての全国連盟の長きに亘る議長が東部地域から記す」という論稿を、第1巻に寄せていることである。まずは、戦後のドイツ学校田園寮連盟に自らの最後の意志を伝えたともとれるようなこの論稿を皮切りとして彼の歴史認識を探りたい。ニコライは論稿の中で、これまでの学校田園寮活動を振り返る中で、ナチス期の学校田園寮活動について次のような一節を記している。

「1933年以降の「全国連盟」の解体とナチス教員連盟への強制的同質化は、私たちの熱心な試みの根底を何も変えなかった。教師から教育権を奪おうとしたヒトラー・ユーゲントによって危険が差し迫った。しか

しながら、長期間の、そしてしばしば大変困難なヒトラー・ユーゲントとの闘争の中で、運動を守ることだけでなく、計画的に拡充することと法的に根付かせることにも私たちは成功した。私たちは、1936年のビーレフェルトとハノーファーでの国際会議で、400か所を超える学校田園寮の設置によって外国から注目を集めることができた。第二次世界大戦は、私たちの活動があらゆる激動や衝撃に耐え得ることを証明した。学校田園寮は、戦争の間、「学童疎開」を通じて、10万人の子どもたちの健康と生命を救った⁵。

このことからニコライの歴史認識について以下の諸点が確認できる。第1に、ナチス体制下で学校田園寮活動は制度的な変容を余儀なくされたものの理念的には変わっておらず、学校田園寮活動はナチス体制下でも着実に進展したと考えていることである。「400か所を超える」とわざわざ学校田園寮の数を強調していることから、たとえナチス体制下であろうが学校田園寮の数が増えることは、戦後においても彼にとって好ましいことであったことが分かる（ただしドイツ学校田園寮連盟の公式統計では、1936年の時点で学校田園寮の数は400にまで達しておらず⁶、加えて、第3節で取り上げるニコライ自身の記述ともこの数字は矛盾している）。なお、引用文中の「1936年のビーレフェルトとハノーファーでの国際会議」は、1936年7月18日～24日の日程で開催された第3回国際野外学校会議（Der internationale Kongreß für Freiluftschule）を指しており（ちなみに第1回国際野外学校会議は1922年にパリで、第2回は1931年にブリュッセルで開催されている⁷）、ニコライは学校田園寮活動のトップとして、本会議に中心となって関わったのである。

第2に、学校田園寮を侵食せんとするヒトラー・ユーゲントとの闘争に打ち勝った時代としてナチス期を捉えていることである。このことは、ヒトラー・ユーゲントとその統括部署であるライヒ青少年指導部（Reichsjugendführung）が、ドイツユースホステル全国連盟を支配下に置いた上で、同じ宿泊施設であることからユースホステルと機能が類似した学校田園寮をも自らの管轄下に置こうと画策するも、ニコライやザールハーゲラ学校田園寮活動を担った中心人物たちが学校田園寮の独自性を守り通した1935年～1936年頃の闘争のことを意味している⁸。こうしたヒトラー・ユーゲントから攻撃を受けたという事実は、自らがナチス体制の「被害者」であることをアピールするための格好の素材であったといえ、実際に財産の差し押さえに対して抗議したり、再度教職に就くことを訴えたりしている敗戦直後の書簡の中で、ニコライはそのことに

言及している⁹。

第3に、学校田園寮活動を担った教師たちが、第二次世界大戦下での学童疎開（Erweiterte Kinderlandverschickung, KLV）に携わったことで、子どもたちの生命を守った点を強調していることである¹⁰。アンナベルク・ブッフホルツを拠点としていたニコライは、大都市ハンブルクを拠点としていたザールハーゲとは異なり、そこまで深く学童疎開に関与したわけではないが、戦後においてもニコライは、親元から引き離して子どもたちのナチ化を促進させた側面もあった学童疎開を批判的に見るどころか、自らの「拠り所」としていたのである。

以上、まずは『学校田園寮』の第1巻に掲載されたニコライの論稿の一節を基に、ニコライの第二次世界大戦後の歴史認識を垣間見てきた。雑誌の性格上止むを得ないのかもしれないが、ナチス期の学校田園寮活動であっても様々な次元でその「功績」が主張され、ナチス期の学校田園寮活動に対する省察的な態度は見られないというのがその特徴である。

3. 「回想記」にみる歴史認識

（1）回想記の構成

ニコライの歴史認識を知るうえで貴重な史料が、ドレスデンにあるザクセン中央州立文書館に所蔵されているルドルフ・ニコライ関連の史料のNr. 30のファイルに収められている彼の回想記「ドイツにおける学校田園寮運動の端緒の回想—20世紀前半におけるドイツの学校制度の内的革新の試み—」（Erinnerungen an die Anfänge der Schullandheimbewegung in Deutschland. Versuch einer inneren Erneuerung des deutschen Schulwesens in der ersten Hälfte des zwanzigsten Jahrhunderts, 以下、回想記とする）である。Nr. 30のファイルが丸々この回想記からなっている。

回想記は、ニコライが75歳であった1960年に著されたもので、彼が10歳であった1895年から第二次世界大戦後までを対象としている。ただ、1960年に書かれたものであるにも関わらず、第二次世界大戦後の15年間にはほとんど紙幅が割かれていない。そのことは、東ドイツでは学校田園寮活動が花開かなかつたことを象徴的に示すものであろう。なお、本回想記は公開を意図して記されたものではないため、一個人の率直な歴史認識を知ることができるという点でも有益な史料である。

回想記の章構成について、本稿の主題の点から、1933年から1945年までを対象とした章に限定して列挙すると次の通りである。

- ・激動の中における学校田園寮 1933年 ⑥
- ・ハノーファーにおけるドイツ学校田園寮の第5回全国会議 1933年 ⑦
- ・再び好転していく ②
- ・ヒトラー・ユーゲントに対する困難な防衛闘争の中の学校田園寮 1933-1945年 ③⑤
- ・ナチス教員連盟 (NSLB) との共同活動の中の学校田園寮, バイロイトにおける第6回全国会議1936年 ③
- ・バレンシュテットにおけるドイツ学校田園寮の第7回全国会議 1938年 ②
- ・私たちの学校田園寮船 ④
- ・学校田園寮の思想が遠方へと達した ⑨
- ・最高潮と突然の崩壊 1939年 ⑤
- ・第二次世界大戦下の学校田園寮 ④
- ・学校田園寮と学童疎開 (KLV) 1940-1945年 ③
- ・辛い最後—そして将来への希望 1945年 ⑤

章ごとに打っている丸数字は、各章の頁数であり、割かれた頁数の違いを明示するために筆者が付したものである。また、章のタイトルの表し方に一貫性がなく、対象となっている年次が書かれている章もあれば書かれていない章もある(たとえば、「再び好転していく」や「私たちの学校田園寮船」などに年次が書かれていないのは誤植ではない)。さらには、目次に示された章の標題と本文の章の標題が若干異なっている章もある。これについては併記すると混乱する恐れがあるため、本稿では目次に示された章の標題ではなく、本文の章の標題を記載するものとする。加えて、最後に示した「辛い最後—そして将来への希望」には「1945年」という年次が記されているが、実際に対象となっているのは1945年だけでない。この章は回想記の最後の章でもあり、1945年のみに止まらない第二次世界大戦後のことが綴られている。

以上のような回想記の章構成自体がニコライの歴史認識を表しているといえるが、まず注目すべきは、他の章の頁数が全て一桁で収まっているのに対して、「ヒトラー・ユーゲントに対する困難な防衛闘争の中の学校田園寮 1933-1945年」だけ全35頁と突出していることである。単純計算で1933年以降の記述の約4割がこの章に充てられ、1932年以前の第二帝政期およびヴァイマル期を含めてもここまで頁が割かれている章は見られない。ヒトラー・ユーゲントに対するニコライの敵意は先述したところであるが、彼は、意図的ともいえるほどに、自らが身を置いたナチス期をヒトラー・ユーゲント(及びライヒ青少年指導部)との「闘

争」の時代として認識していたことが分かる。そしてそうした彼の認識は、ナチス体制の「被害者」としての位置付けを意識的に創出するものでもあったといえよう(本稿では、「ヒトラー・ユーゲントに対する困難な防衛闘争の中の学校田園寮 1933-1945年」の章については割かれている頁数の多さを指摘するだけに止める)。

さらに章の標題から注目されるのは、ナチスが政権を掌握した1933年を取り上げた章が「激動の中における学校田園寮」と標記されているのに対して、第二次世界大戦が勃発した1939年を取り上げた章が「最高潮と突然の崩壊」と標記されていることである。すなわち、ナチスの政権掌握は学校田園寮活動にとっては「激動」に過ぎなかった一方で、第二次世界大戦の勃発は学校田園寮活動の「崩壊」をもたらすものであり、学校田園寮活動の歴史からみて、1933年よりも1939年の方が転換点としてより強く認識されていたことが窺える。

以下、回想記の中から本稿のテーマとの対応において重要と考えられる箇所をいくつか引用しながら、第二次世界大戦後のニコライの歴史認識について学校田園寮活動と関連付けつつ検討していく。

(2) ナチスの権力掌握および政策に対する認識

まずは1933年1月30日のナチスの権力掌握と、その後のナチスの政策に対するニコライの認識について目を向けたい。ナチス期の最初の章となる「激動の中における学校田園寮 1933年」の冒頭で、ニコライは次のように記している。

「巨大な雷雨がドイツ中に鳴り響いた。これまでの国家形態は壊された。ナチズムがドイツの指導を受け継いだ。ナチズムは、人口の大部分、すなわち労働者と結びついて、私たちの国家の再建と社会的公正を約束した。失業は一挙に消え去った。これまで無益に浪費されていた人々が、立て直されていく国民経済への奉仕のために投入された。全ての不健全なものが消え去り、そして輝かしい上昇が約束された」¹¹。

ニコライは、ナチスの権力掌握を「巨大な雷雨」と形容し、ナチスによってこれまでの国家形態が壊されたと述べている。しかしながらそのうえで注目されるのは、とりわけ世界恐慌以降深刻になっていた、経済の立て直しや失業問題の解消にナチスは「成功」と捉え¹²、戦後においても決してナチスの政策を否定的には見ていないことである。それゆえに、「巨大な雷雨」と形容されたナチスの権力掌握も、同様に否定的なものであるようには映らない。こうしたナチスに対

する認識が、1933年よりも1939年を歴史の転換点とするニコライの歴史認識につながっていくものであったといえよう。

（3）ナチス期の学校田園寮の増加に対する評価

ナチス体制下にあっても学校田園寮の数が増加し拡大したことを、戦後も肯定的に評価していたことを第2節で指摘したが、ニコライは、回想記の「最高潮と突然の崩壊 1939年」の章でも、具体的に数字を示しながら次のように書いている。

「政治的には空に雷雲がかかっているにも関わらず学校田園寮はさらに上向いた。1938/39年度には、ドイツにおいて、2,698校に亘る8,967学級が学校田園寮活動に参加し、滞在日数は延べ2,621,718日に及んだ。滞在した児童生徒の総数は246,554人にのぼった。〔中略〕学校田園寮の新設が急激に増えていることは喜ばしい（新設された数は1935年：36か所、1936年：26か所、1937年：39か所、1938年：44か所）。滞在した児童生徒は、113,399名が国民学校の児童、106,826名が高等学校の生徒で、残りは中間学校・職業学校の生徒である。学校田園寮の数は、1925年には120か所であったが、1939年には378か所にまで増加した」¹³。

先述したように、1925年は、翌年のドイツ学校田園寮全国連盟の創設へとつながる第1回の全国連盟会議（当時はまだ正式には全国連盟は発足してはなかった）が開催されたという点で、学校田園寮活動の「元年」とも呼べる年であり、ニコライは、第1回の全国連盟会議が開催された1925年を基点として、学校田園寮は一直線上に増加したと見ている。それゆえに、学校田園寮活動の歴史では、やはり1933年が明確な転換点となっていないことが分かる。学校田園寮活動の指導者として学校田園寮の数を重視する彼にとって、ナチスによって学校田園寮活動の性格が変容を被ったにも関わらずナチスの権力掌握はそれほど問題にならず、歴史のより大きな転換点はやはり第二次世界大戦の勃発にあったのである。

（4）第二次世界大戦と学校田園寮活動

歴史の転換点をナチスの権力掌握よりも第二次世界大戦の勃発に見るニコライにとって、第二次世界大戦に対しては厳しい批判の眼差しが向けられる。たとえば、「学校田園寮の思想が遠方へと達した」の章の最後では、第二次世界大戦が次のように断罪される。

「1939年に、犯罪者たちが、民族間の平和へのあらゆる希望を引き裂き、世界の歴史においてこれまで体験したことがないような無意味な殺戮へと世界を陥れ

た。3,000万人の死者の血が流れたことは耐え難いことである…！」¹⁴。

第2節でも言及したように、第二次世界大戦後においてもナチスを全面的に批判しているとは言い難いニコライであるが、ことが第二次世界大戦になると、名指しはしていないもののナチスの指導者を「犯罪者」として徹底して批判する立場をとっているのである。なお、ニコライは、第二次世界大戦の犠牲者について3,000万人と記しているが、回想記を見る限りその根拠は不明である（現在の研究では、ドイツとソ連だけに限っても、その犠牲者は3,500万人以上に及ぶとされる）¹⁵。

そうした第二次世界大戦への批判的な言及は、「最高潮と突然の崩壊 1939年」の章の最後の箇所でも見られ、「そこにこれまでこの地球で引き起こされたあらゆる戦争の中で最も常軌を逸したものが勃発した」¹⁶と第二次世界大戦のことが述べられる。こうした記述からは、自身が身をもって経験した第二次世界大戦の悲惨さが如実に伝わってくるといえよう。しかしながら、加えて注目されるのは、この記述の前に「あらゆる地域への学校田園寮の驚くべき前進！」¹⁷、この記述の後には「学校田園寮もまたその混乱へと引き込まれた」¹⁸と記されていることである。戦後のニコライが、第二次世界大戦を人道的な観点から批判していたことを否定するものではないが、一方で、広がりを見せていた学校田園寮活動を中止に追い込んだことを理由として第二次世界大戦を批判しているという側面もまた見受けられるのである。

同様の認識は、1939年8月20日～26日の日程でシュトゥットガルトにおいて開催された会議からアンナベルク・ブッフホルツへと帰る途上、第二次世界大戦の引き金となった1939年9月1日のドイツ軍のポーランド侵攻の報せにニコライが接した際のことについて記した箇所でも垣間見られる。すなわち、「帰路においてポーランドとの戦闘という報せに遭遇した。民族の宥和の代わりに新たな人間の憎しみ…」¹⁹という人道的な立場からの第二次世界大戦の勃発への憤りを表した文章に続いて次のように綴られる。

「諸外国は私たちの学校田園寮活動を周知させることに大きな価値を置いてきた。年中、外国からの多くのグループが私たちのもとを訪問し、私たちは（学校田園寮における一筆者注）私たちの生活を披露した。個人、教員グループ、大学生グループ、学校職員、医師、建築家が私たちの活動を知るようになった」²⁰。

ニコライは、第二次世界大戦勃発への憤りに続けて、学校田園寮活動の外国への広がりに関する成果に

ついで言及しているものであり、やはり学校田園寮活動の実施との関わりの中で第二次世界大戦が捉えられている。それゆえ彼が述べる「民族の宥和」とは、「学校田園寮活動の拡大の前提としての民族の宥和」であると解釈することもでき、同様に、本項冒頭の引用文中の「民族間の平和」も、学校田園寮活動の拡大の前提となるものとして捉えることが可能であろう。

以上のように、ニコライは第二次世界大戦を強く批判していたのであるが、人道的な理由からだけではなく、外国も含めて学校田園寮活動を浸透させることを遮ったという理由からも批判していたことが窺えるのである。

(5) ドイツの支配地域の拡大と学校田園寮活動

本節第3項において、「最高潮と突然の崩壊 1939年」の章から、ニコライがナチス期であるにも関わらず学校田園寮の増加を単純に望ましいと捉えている箇所を引用したが、ニコライの歴史認識を知る上で興味深いのは、その箇所に続けて、「オーストリアとズデーテン管区で新設された学校田園寮を含めると、戦争の間にその数は400か所以上にまで増加した」²¹と述べていることである。周知のように、1938年3月13日のオーストリア併合および1938年10月1日のチェコのズデーテン地方の併合は、第二次世界大戦へとつながるナチス・ドイツの対外侵略の端緒となった事変であるが、第二次世界大戦後においても、ナチスが併合した国・地域への学校田園寮活動の拡大を、ニコライが無批判に評価していることが分かる。

「最高潮と突然の崩壊 1939年」の章では、オーストリアとズデーテン地方に関する言及が他の箇所にも見られる。1939年5月にパイロイトで開催された8回目の学校田園寮の全国会議（戦後のドイツ学校田園寮連盟はこの会議を公式の会議としてカウントしていない）や、時期は前後するが、1939年3月のズデーテンドイツ・ナチス教員連盟の管区会議でのことを、ニコライは次のように述べている。

「私たち管区専門担当官（学校田園寮の管区専門担当官－筆者注）が、1939年5月2日～7日にパイロイトで開催された第8回全国会議で初めてオーストリアとズデーテン地方からの友人に挨拶してきたときのことは、感動的な体験である。彼らは私たちに、国境によって私たちから分離され、最終的に「ライヒへの帰郷」を果たしたドイツ人同胞の数百年昔からの「ライヒ」への憧れについて話した。「ライヒ」という言葉は、彼らには、ちょうど神秘的な輝きに包まれた概念である。〔中略〕1939年3月8日～12日のズデーテンド

イツ・ナチス教員連盟の最初の管区会議に際して私は講演を行なうためにライヒェンベルク（チェコ名ではリベレッツ－筆者注）へ招待された。彼らがそうした受け入れ準備をもって私たちの運動に向き合ってくれていることは感動的なことである。その新たに任命された管区専門担当官のヴィールは、1940年8月にズデーテン地方において学校田園寮の最初の会議を開催することを提案した」²²。

ナチスによる併合によってオーストリアやズデーテン地方に学校田園寮が広がっていったことを考えると、同地での学校田園寮活動に関する記述は慎重ならざるを得ないはずであるが、ニコライは何の注釈もなく「感動的」と記しているのである。そしてそうした見解を支えているのが、戦後においても、オーストリアやズデーテン地方が「ライヒ」としてのドイツに帰属することを当然のこととして捉えている彼の歴史認識である。同章ではズデーテン地方に関して次のような文言も見られる。

「チェコスロヴァキアの複言語併用地域で、多くの苦しみのもとでドイツ人気質（*Deutschtum*）を長い間守ってきた教師たちは、彼らの困難な立場に関する衝撃的な報告を伝えたが、最終的にドイツの生存圏に帰属できたことは非常に幸福なことである」²³。

こうしたニコライの認識の背景として、ドイツの国境地帯に積極的に学校田園寮を設置して当地に住む人々のとの交流活動を推奨するなど、学校田園寮活動を、第一次世界大戦後の「在外ドイツ人問題」の「解消」に寄与すべきものとしても捉えていたというヴァイマル期から続く彼の立場が挙げられ得る²⁴。

この問題をさらに掘り下げるために「私たちの学校田園寮船」という章にも目を向けたい²⁵。学校田園寮船とはいわば「移動型の学校田園寮」であり、船で国境地帯を訪れるという特徴を有し、第一次世界大戦後の「在外ドイツ人問題」の「解消」を背景として誕生したものである。学校田園寮船は構想としてはヴァイマル期から見られたものの、具体化されたのはナチス期であり、学校田園寮船には「ハンス・シェム号」という名前が付けられた。名前の由来となったハンス・シェム（Hans Schemm, 1891-1935）はナチス教員連盟の初代指導者で、1933年7月27日にニコライらと「ドイツ教育制度への学校田園寮運動の組み込み」と題された声明を発表するなど²⁶、ナチス体制下における学校田園寮活動の「振興」を推進した人物でもある。シェムは1935年3月に飛行機事故のために命を落としており、学校田園寮船にシェムの名が冠されたのは、彼への追悼の意図もあったといえる。

学校田園寮船による訪問は、1936年から1939年まで、1年に1回の計4回実施され、1938年の3回目では新たにドイツに併合されたオーストリアを、そして1939年の4回目ではオーストリアに加えて、同じく新たにドイツに併合されたズデーテン地方を、航海全体の一部としてではあるが早速訪れている。

3回目の航海についてニコライは次のように記している。「1938年は、学校田園寮船が春にプレーメンから航行を開始したとき、主に北西ドイツを訪れる予定であった。学校田園寮船がオスナブリュックーミュンスターーケルンーコブレンツと経由してモーゼル川を上っていくと、ドナウ川へと呼び戻された。そこから船はライヒへと帰還したオーストリアに向かい、ウィーンを越えてハンガリー国境へと航行した。学校田園寮船は4,500kmを進み、21ヶ所で停泊し、合計1,080人の子どもたちと30人の教師たちが参加した」²⁷。

そして、4回目の航海の記述は次の通りである。「学校田園寮船は最後の航海へと1939年春に出航した。再度ウィーンを訪問し、それから方向を転換して再びニュルンベルクを越えてライン川に入り、最も西側の地点であるトリニアに到着した。しかしながらズデーテン・ドイツ人同胞の編入後、方向を変えてドレスデンへと向かい、アウシヒとライトメリッツ（チェコ名ではそれぞれウースチー・ナド・ラベムとリトミエリツェで、ともにズデーテン地方に位置する－著者注）まで上っていった」²⁸。

ここでも、特に注釈もなくオーストリアの併合を「ライヒへと帰還」と表記したり、ズデーテン地方の併合を「ズデーテン・ドイツ人同胞の編入」と表現したりするなど、ナチスによるオーストリアとズデーテン地方の併合に関して無批判であることが窺える。もちろんナチスの対外侵略を直接的に肯定しているわけではないが、以上のようなオーストリアおよびズデーテン地方と学校田園寮との関係を巡る記述は、ナチスの対外侵略を間接的に肯定していたと解釈されても止むを得ないものであるといえよう。

（6）学童疎開と学校田園寮活動

第2節で記したように、ニコライは、自らは深く関与してはいなかったものの、学校田園寮活動の関係者が第二次世界大戦下で学童疎開に寄与したことを肯定的に捉えていた。それゆえ回想記においては、決して長くはないが、学童疎開についても、「学校田園寮と学童疎開（KLV）1940-1945年」という独立した章を設けている。そこでの記述を通して改めて第4項および第5項で取り上げた内容を確認したい。

ニコライは、1940年10月に、ベルリンとハンブルクの子どもたちを皮切りとして学童疎開が始まった背景について、次のように述べている。

「恐ろしい全面戦争は、子どもたちにも容赦しなかった。爆弾が、前線を遙かに越えて、諸都市に無慈悲に投下された。唯一の救いは、戦争に対して責任のない子どもたちを、空襲の危険のある地域から田園地域へと連れていくことである」²⁹。

ニコライが学校田園寮活動の関係者が関わった学童疎開を高く評価していることが改めて垣間見られるとともに、ここでも「恐ろしい」「容赦しない」「無慈悲に」といった強い言い回しをもって、大人と子どもの別なく襲い掛かる第二次世界大戦の悲惨さが、第4項と同じように綴られていることが特徴的である。

また前項の内容に関わって、ニコライが次のように述べていることが注目される。

「学童疎開と学校田園寮」というテーマについて詳細に伝えることは、私は学童疎開には自分の学校田園寮の狭い範囲でのみ関わったため私自身の課題でなく、むしろ学童疎開に関する特殊部隊で5年間働いたザールハーゲ博士とフリーフテヒニト氏の課題である。彼らはザクセン、バイエルン、ハンガリー、ズデーテン地方、ペーメン・メーレン保護領におけるハンブルクからの受け入れ地域に責任をもった」³⁰。

大都市であるがゆえにハンブルクからの学童疎開の派遣地域は多岐にわたり、その中には旧来のドイツ領や同盟国ハンガリーだけでなく、ズデーテン地方やペーメン・メーレン保護領が含まれ、それらの地域への派遣に関して特に注釈もないことから、ナチスが武力をもってチェコを支配下に置いたことに対してやはり無批判であることが窺えるのである。なお、ザールハーゲと並ぶ「フリーフテヒニト氏」とは、ハンブルクにおける学校田園寮活動の指導者の一人であったユルゲン・フリーフテヒニト（Jürgen Früchtenicht）を指しており、学童疎開の開始後は、ハンブルクから疎開してくる子どもたちの受け入れの任務に当たるべく、バイエルン＝オストマルク大管区に派遣された人物である³¹。

以上、繰り返しにはなるが、学童疎開に関する章でも、学校田園寮活動とも関連付けながら第二次世界大戦への批判が綴られる一方で、武力によるドイツの支配地域の拡大については戦後においても批判的には見ていないというニコライの歴史認識を見出すことができる。

(7) 敗戦時の心情と学校田園寮活動

本節の最後に、回想記の最終章「辛い最後—そして将来への希望 1945年」を取り上げたい。この章では1945年5月8日のドイツ敗戦直後の心境について次のように述べられる。

「1945年5月8日正午に休戦。3時間後には戦闘行為なくソヴィエト占領軍が入場。私たちの精神的な崩壊を伝えることを本当は免れたい。良心に基づいていた私たちは、誤った道にいたことが明らかになった。私たちの罪は、戦場の外で、そして強制収容所の中で起こったことを知らなかったことである。そして私たちは恐ろしい非人間的な残虐行為の大きさを知ったとしても、手を打てなかったであろう。というのも、強制収容所とブレッツェンゼーの首切り斧が救いがたく死をもたらすだろうからである。私たちと私たちの子どもたちの理想主義は嘆かわしいことに犯罪に悪用された。私たちの唯一の慰めは、私たちが学校田園寮とユースホステルにおいて、殺戮の時代の中でも多数の子どもたちの命を救ったことである」³²。

ニコライは、ナチスのホロコーストや民間人殺害を明確に犯罪行為として認識していることが分かるが、そうした犯罪行為がなされたことについて知らなかったこと、そして仮に知っていたとしても強制収容所やブレッツェンゼー刑務所の存在が抵抗を困難にしたであろうと考えることをもって、ナチス体制下に従属した自分と「折り合い」をつけている。ナチス体制下にあった多くの普通の人々が大战後に自己を正当化した論理にニコライも拠っていたといえるのである。

そして自身は「良心」に基づいていたと述べ、ナチス体制下における自身の学校田園寮活動については全く否定されることはないとしている。ニコライは、学校田園寮活動のトップであったにも関わらず、学校田園寮活動の理想を悪用したのは自身ではなく飽くまでもナチスであると主張し、自身や学校田園寮活動の関係者が学童疎開（「学童疎開」とは書いてはいないが、引用の中の最後の文章が「学童疎開」を指しているのは明らかである）に従事したことをもって戦時下の子どもたちの命を救ったことを自負しているのである。

4. おわりに

以上、本稿では、機関誌『学校田園寮』第1巻に寄稿した論稿および回想記「ドイツにおける学校田園寮運動の端緒の回想—20世紀前半におけるドイツの学校制度の内的革新の試み—」を基に、ルドルフ・ニコライの第二次世界大戦後における歴史認識について検討してきた。結論としては、前稿で検討した盟友のザー

ルハーゲの歴史認識とほぼ同様のものであったといえる。そのことを確認したうえで、改めてニコライの歴史認識についてまとめたい。

権力掌握後のナチスの経済政策・雇用政策については賛同しているように見受けられることから、ニコライは、戦後においても、ナチスを全面的に批判していたとは言い難い。しかしながら自らも大きな困難を強いられた第二次世界大戦のことになると、戦争を引き起こしたナチスに厳しい批判の目が向けられ、ホロコーストや民間人殺害などのナチスの犯罪も「非人間的な残虐行為」として弾劾される。

ただしナチスを批判しつつも、第二次世界大戦の開戦まではナチスも「良かった」と考える立場に立っているだけに、「過去の克服」を支えるような歴史認識からは距離がある。すなわち、自らもナチス体制を支えた一員であるにも関わらず、自身はナチスや第二次世界大戦の一方的な被害者であると認識している色彩が強く見られるのである。ニコライがヒトラー・ユゲント（およびライヒ青少年指導部）との「闘争」を強調したこともまた、飽くまでも自分たちはナチス体制下の「被害者」であったことをアピールする論法であったと捉えることができよう。また、第二次世界大戦批判に関しても、人道的な観点からなされただけでなく、自らが生涯捧げた学校田園寮活動の周辺地域への浸透を遮ったことを理由としてなされたという一面も見受けられた。

そしてナチス体制下の学校田園寮活動について目を向けると、そこには以下のように、批判的な認識は全く感じられない。

第一に、ナチス体制でも学校田園寮の数が増加し、学校田園寮活動が拡大したことが単純に肯定されている。それゆえに、1933年のナチスの政権掌握は、学校田園寮活動の歴史における時期区分として重視されず、必然的にナチス政権下における学校田園寮活動の変容に関する認識は希薄である。

第二に、ナチスが侵略して支配した結果としてオーストリアおよびズデーテン地方にも学校田園寮活動が浸透したにも関わらず、それらの国および地域への学校田園寮活動の拡大が肯定的に見られている。すなわち、学校田園寮活動が関わってくると、対外侵略というナチスの犯罪行為も問題視されなくなるともいえるのである。また、学校田園寮活動関係者が関わった学童疎開において、子どもたちがオーストリアやズデーテン地方、そしてベーメン・メーレン保護領に派遣されたことについても特に否定的な言及は見受けられない。

第三に、学校田園寮活動が停止された第二次世界大戦下における学校田園寮活動関係者の「功績」として、彼らの学童疎開への関与が高く評価されている。学童疎開によって子どもたちが守られた側面があることは否定できないものの、一方で疎開先で子どもたちのナチ化が進められるとともに、子どもたちに多くの困難が強いられたことは、ニコライにとっては全く問題とならないのである。

以上、ルドルフ・ニコライの第二次世界大戦後の歴史認識に関する検討を通して、ナチス体制下において社会活動を継続した人々が、ナチス体制下での自らの「成果」に固執したり、ナチス体制下での自らの行動の「正当性」を主張したりするあまりに、「過去の克服」を支えるような歴史認識をもつことが困難であったということ、具体的な事例として明らかにすることができたといえる。

〔注〕

- ¹ 拙稿「第二次世界大戦後のハインリヒ・ザールハーゲにおけるナチス政権下の学校田園寮運動認識に関する考察」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学〕』第65巻第2号、2019年、43-55頁。
- ² Karsten, Bernd : Die “Schullandheimbewegung” in der SBZ und der DDR (1945-1990), in: Verband Deutscher Schullandheime e. V. (Hrsg.): *Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Zusammengestellt zum 75-jährigen Jubiläum*, Hamburg 2002, S. 167-184.
- ³ Kruse, Klaus: Die Schullandheimarbeit nach dem Zweiten Weltkrieg (1945-1970), in: Verband Deutscher Schullandheime e. V. (Hrsg.): a. a. O., S. 137-166.
- ⁴ Hilbert, Stephan Friedrich: *Lesebuch Umwelt. Der Reformpädagoge Rudolf Nicolai. Ein Leben für das Schullandheim*, Norderstedt 2013.
- ⁵ Nicolai, Rudolf: Der langjährige Vorsitzende der früheren Reichsbundes schreibt aus der Ostzone, in: *Das Schullandheim*, Heft 1 (1951), S. 7.
- ⁶ Verband Deutscher Schullandheime: Entwicklung der deutschen Schullandheimbewegung, in: Bundesarchiv Koblenz B122/5194 (Nr. 235).
- ⁷ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen an die Anfänge der Schullandheimbewegung in Deutschland. Versuch einer inneren Erneuerung des deutschen Schulwesens in der ersten Hälfte des zwanzigsten Jahrhunderts (künftig: Erinnerungen), in: Sächsisches Hauptstaats-

archiv Dresden (künftig: SähStA), Personennachlass Rudolf Nicolai Nr. 30, S. 177.

- ⁸ 学校田園寮の管轄を巡るヒトラー・ユーゲントとニコライらの抗争については以下の拙稿で論じた。拙稿「ナチ時代における学校田園寮運動とヒトラー・ユーゲントの関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学編〕』第60巻第1号、2013年、27-37頁。
- ⁹ Brief von Rudolf Nicolai an das Landratsamt Kreis-kommission Annaberg Erzgebirge, den 14. November 1945, in: SähStA Personennachlass Rudolf Nicolai Nr. 3 (Nr. 5); Brief von Rudolf Nicolai an die Landesverwaltung Sachsen, Ministerium Inneres und Volksbildung, den 16. November 1945, in: SähStA Personennachlass Rudolf Nicolai Nr. 3 (Nr. 2).
- ¹⁰ 学校田園寮活動と学童疎開の関係については以下の拙稿で論じた。拙稿「第二次世界大戦下ドイツ・ハンブルクの学童疎開への学校田園寮運動の関わりに関する考察—ハインリヒ・ザールハーゲの学童疎開認識に焦点を当てて—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要〔教育科学編〕』第64巻第2号、2018年、67-81頁。拙稿「第二次世界大戦期ドイツにおける学校田園寮運動の指導者たちの学童疎開認識に関する考察—機関誌『学校田園寮』に焦点を当てて—」『教育史研究室年報』第23巻、2018年、1-30頁。
- ¹¹ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen, S. 115.
- ¹² なお、ナチスの経済政策の「成功」は幻想に過ぎないことは、以下の研究などによって明らかになっている。アダム・トゥーズ著、山形浩生、森本正史訳『ナチス 破壊の経済—1923-1945—（上）』みすず書房、2019年。同『ナチス 破壊の経済—1923-1945—（下）』みすず書房、2019年。
- ¹³ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen, S. 184.
- ¹⁴ Ebenda, S. 183.
- ¹⁵ 大木毅『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍—』岩波書店、2019年、iii-iv頁、をもとにして導き出した。
- ¹⁶ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen, S. 188.
- ¹⁷ Ebenda.
- ¹⁸ Ebenda.
- ¹⁹ Ebenda, S. 180.
- ²⁰ Ebenda.
- ²¹ Ebenda, S. 184.
- ²² Ebenda, S. 186.
- ²³ Ebenda, S. 187.
- ²⁴ 新教育運動の一環として展開されたヴァイマル期における学校田園寮活動においても、子どもたちの民

族意識を涵養させるために、国境地帯における学校田園寮での活動が重視されたことについては、以下の拙稿で言及した。拙稿「ヴァイマル時代におけるシュールラントハイムの活動状況について—その多義性・多様性を中心として—」『国際教育文化研究』第3巻, 2003年, 15-26頁。

²⁵ 学校田園寮船については、以下を参照。König, Karlheinz: Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933-1945), in: Verband Deutscher Schullandheime e. V. (Hrsg.): a. a. O., S. 118-121. なお、このケーニッヒの論稿の内容は、小峰による以下の文献の中で紹介されている（小峰総一郎『ナチス教育断章—ナチス教員連盟, ナチスの学校田園寮ほか—』三省堂書店／創英社, 2022年, 53-102頁。その中で学校田園寮船

については94-99頁が該当。）

²⁶ Einbau der Schullandheimbewegung in das deutsche Erziehungswesen, den 27. Juli 1933, in: Bayerisches Hauptstaatsarchiv MK42607 (なお、このファイルには史料番号が付されていない)。

²⁷ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen, S. 174.

²⁸ Ebenda.

²⁹ Ebenda, S. 193.

³⁰ Ebenda, S. 195.

³¹ Brief von Heinirch Sahrhage an die Kreissachbearbeiter für Schullandheime in NSLB. Gau Hamburg, den 5. Oktober 1940, in: Staatsarchiv Hamburg 361-2VI_1547 (Nr. 29).

³² Nicolai, Rudolf: Erinnerungen, S. 196.

Historical Recognition of Rudolf Nicolai after World War II —As Leader of the *Schullandheimarbeit* in Nazi Germany—

Tomohiro EGASHIRA*

Rudolf Nicolai (1885-1970) was a top leader of the *Schullandheimarbeit* (activities in rural school hostels) of Nazi Germany. Based on an analysis of his memoirs written in 1960, this research paper discusses Rudolf Nicolai's thoughts regarding Nazi World War II and the *Schullandheimarbeit* that functioned under the Nazi regime.

This research confirms that Nicolai remained in approval of the Nazi economic and employment policies and was not in complete disagreement of the Nazi ideology. However, Nicolai criticized aspects of Germany in World War II and disapproved of the Holocaust with its indiscriminate killing of innocent people, which he described as “inhuman barbarity.”

However, the following points illustrate that Nicolai's understanding of Nazi and World War II was far from an acknowledgement of *Vergangenheitsbewältigung* (overcoming the past).

- 1) In spite of his positive involvement in the Nazi Germany, Nicolai regarded himself as a true victim of Nazi and World War II. This may be considered part of his strategy to emphasize how *Schullandheimarbeit* suffered from the attacks of the Hitler Youth.
- 2) Nicolai criticized World War II from a humanitarian aspect and stressed the importance of ceasing expansion of the *Schullandheimarbeit*.

Furthermore, as shown below, Nicolai did not criticize the *Schullandheimarbeit* during the period of the Nazi era.

- 1) Nicolai evaluated *Schullandheimarbeit* simply as the increase in the number of *Schullandheim* in the Nazi era. Therefore, to Nicolai, the control of the state by the Nazi regime in 1933 was not a critical turning point in the history of *Schullandheimarbeit*.
- 2) Nicolai evaluated positively the expansion of *Schullandheim* to Austria and Sudeten under the Nazi regime. He prioritized the expansion of *Schullandheim* and did not speak out against the Nazi regime's invasions.
- 3) Nicolai took pride in his contributions towards the evacuation of children during World War II. He did not, however, emphasize the Nazification of children during the evacuations.

People like Nicolai, who continued social activities in Nazi Germany, eluded any historical recognition leading up to the *Vergangenheitsbewältigung* after World War II. Furthermore, he insisted on demanding recognition for his own “achievements,” as well as the justifications for his actions occurring during Nazi Germany.

* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

